

《パネルディスカッション I》

核医学—*in vitro*—今後の展望

司会の言葉

宮 地 幸 隆 (東邦大学医学部第一内科)

笠 木 寛 治 (京都大学医学部核医学科)

放射性物質の *in vitro* への応用は数年前の全盛期から次第に非放射性物質法へ転換されつつある。本パネルディスカッション核医学—*in vitro*—今後の展望は、[1] 放射性物質、[2] ホルモン、[3] 遺伝子、の 3 つの part に分けて、放射性物質を用いる *in vitro* の方法の利点を論じてもらう。

まず放射性物質では放射性物質の測定効率をあげるための方法を塚田先生に、*Helicobacter pylori* 診断への安定同位元素の応用を成木先生に述べてもらう。

長い間にわたり *in vitro* 核医学の中心であった放射性物質を用いるホルモンの測定法について、ペプチドホルモンとステロイドホルモンに分け、放射性物質を用いる利点を非放射性物質を用いる方

法と比較しながらそれぞれ笠木、宮地が述べる。

遺伝子の part では感度の点で非放射性物質を用いる方法より優れている放射性物質を用いるバイオイメージングについて宮原、三浦先生に解説してもらう。また特別発言として遺伝子発現研究において果たしてきたラジオアイソトープの役割と今後の展望について三浦(謹)先生にお話ししてもらう。

このパネルディスカッションをとおして放射性物質を用いる *in vitro* 方法の利点、放射性物質を用いる方法のさらなる改善、遺伝子研究への功績について論じてもらい、放射性物質を用いる *in vitro* の方法の今後の発展の期待をこめた。